

[講演会抄録]

## 東洋英和女学院大学 開学20周年記念講演会

2010年1月15日

カーチス教授 どうも、みなさん、こんにちは。ジェラルド・カーチスです。今日は初めてこの大学に来るチャンスが今日あって非常にうれしいです。うれしいのはいくつか理由がありまして、1つは鮑戸学長先生と、今彼がおっしゃったようにもう長年のつきあいで、友人の中でも非常に親しい友人だけれども、いろんな意味で僕の上の人だと思っています。まずは歳が上ってということと、後は知識も上。それで何よりも抜群の記憶力。これはもう僕よりずっと上ですね。だから、鮑戸さんともずっと30年ぐらいいは知っているんですけども、さっき池田副学長に聞かれて、「どこで一番最初に会ったんですか?」と聞かれた時に、今、鮑戸さんの話を聞いて、「あ、そうだったのか」と思い出しました。なるほど、まずはニューヨークだったと。その後もしょっちゅう会ったりしてます。ですから今日、彼が学長を務めていらっしゃるこの東洋英和の大学に来られたこと、本当にうれしいです。また今日は何か初めて名誉教授であって。ですから、これは非常におめでたい席であって、その中で来てみたら私の最初の本を訳して下さい、ずっと友人でもある山岡清二先生がいらっしゃる、名誉教授になっている。今日、ここに来るまではそういうことを知りませんでしたので非常にうれしく思ってます。そうしたら、こっちを見たら、逸見謙三先生ではありませんか?と。もうずっと長く、久しぶりなんですけれども。逸見先生にもここで会えるとは思いませんでしたので、おめでとうございます。私、非常にうれしいです。他にも何か存じているだろうと。

それだけに僕はやっぱり日本との関わり合いが長くて、さっき紹介された『政治と秋刀魚』、ちょっと変わったタイトルの本なんですけども、私が最初に日本に来たのが1964年の夏で東京オリンピックの直前で、羽田からバスに乗って東京の都心に出てタクシーに乗って国際文化会館に行ったんですね。最初に泊ったのは国際文化会館。その時タクシーの運転手さんが、あの当時は軍人ではない外国人は珍しいことで、何で日本に来てるのかと聞かれて、カタコトに日本語で一生懸命話をして、文化会館に着いて荷物降ろしてくれて、それで言われたのは、「日本語が上手ですね、がんばって下さい」って言われた。着いた日から日本語が上手だと。びっくりして感激して、「いい国だなあ」と思って、それから、ずっと45年間、その気持ちで日本を研究しています。後になってわかったのは、だいたい外国人がタクシーに乗ってカタコトでも日本語で話せば、まず言われるのは、「日本語が上手ですね」というのは、それは1つの礼儀であるということ。運良くその最初の日にはわからなかったけれども。

最近、去年出した本の中にちょっと書いたんですけども、最近気が付いたのは、タクシーに乗ると、少なくとも僕は40年前に来た時よりも、日本語はいくらか上手になったと思うんですが、「日本語が上手ですね」とはあんまり言われない。何で言われないかと言ったらね、だいたい最近タクシーに乗ると中年の男の運転手さんが、僕がどっか行きたいとしたら、「ちょっとお客さん道順教えていただけませんか」って言われる。要するに、リストラされて仕事失って、それで仕方なくタクシーの運転手になるのがものすごく今多いのですね。僕は規制緩和を非常に、これからの日本にとって非常に重要ではあると思うんですけども、規制の緩和すべきことと、あんまり緩和すべきではないところがあって、あんなにタクシーの規制を完全に緩和してしまって、誰も乗っていないタクシーの渋滞というのはあれは多分東京だけ、東

京とか、大阪もそうなんです。名古屋もそうなんです。どの町に行っても、仙台に行ってもどこ行っても、とにかくタクシーがいっぱい溢れて、それで行列、かつ狭い道にタクシーがこういう風に並んでいてお客を待っているっていうのは、やっぱり規制というのはある程度あるべき時もあるかなと思うんですが。

そういう訳で日本は40年、45年前に来た時の日本、高度成長時代の日本。もう活気に溢れて。まだ学生運動が激しくて、総評という労働組合の連合体がマルクス主義のどちらかと言えば、労働運動よりも政治運動をやるような総評が強くて、また社会党が3分の1の勢力で憲法改正なんかやろうとする自民党に対するブレーキを掛ける。どこか非常に面白い国だなと。政治も面白いし、この社会が目の前で変わっていくというような感じで見ていました。それで、その時のみなさんの日本人の国民のみんなの気持ちだと思うんだけど、まあいろいろな問題があるけれども、将来は今より良くなるんだというその気持ちが多かったんですね。多かったというより圧倒的だったんです。今の世論調査見ていると、将来の子供の生活水準は、ひょっとしたら私達よりも低くなるだろうと。将来は明るくない。将来はもっと厳しくなる。教育もやっぱり日本の公立学校、僕が来た頃、日本の公立学校ほどすばらしい学校はないというくらい夢だったんですね。日本の教育がタダで、ほとんどの学生が高校を卒業するまで学校に行って、それで公立のパブリックスクールはすばらしいというのが、いつの間にか、私の日本人の友達も、日本の学校に行かせるよりも外国の学校に行かせたい、外国に行かせたい。公立学校に行かないで、何とかプライベートスクールの私立に入れたい。お金がそんなになくても、無理して私立に入れる。こういう変化が非常に悲しいですね。

私は最近、講演が割といろいろやっているんですが、日本人を相手にしている講演と、あとは外国人を相手にしている講演。外国人に最

近講演をしている時に、私のキーフレーズはね、“Don't underestimate Japan”、過小評価しない方がいい。この国には非常に潜在的な力がある。政治さえもうちょっとしっかりしていたら、また日本は良くなる。日本は非常に強いものを持っている、という話を最近するんです。バブルの最中に、私、よくアメリカ人相手に講演した時に、あの時に21世紀は日本の世紀になる、日本は世界の一番大国になる。ソ連が崩壊して冷戦時代が終わって、勝ったのは日本だと、そういう風にアメリカで言われて、ご存じの通り、急な円高になって、それで日本の会社がアメリカでいろんな投資をして、カリフォルニアのプライベートビーチのゴルフ場を買ったり、いろんな所を買って、ロックフェラーセンターまで買ったんですね。あれ、確か三菱地所だったと思うんですが。それでニューズウィークが特集をして、記事の中で、来年のクリスマスはクリスマスツリーではなくて、「盆栽プラント」がロックフェラーセンターにあるだろう、というぐらいに「日本脅威論」があったんですね。その時、私はいや、日本には強さばかりではなくて弱さもあるという話をしたら、すごい怪訝そうな顔をされるわけですね。やっぱりこの学者は世の中全然変わって、これから日本の時代だっるのがわかってないな、って顔をされたんですね。

最近、“Don't underestimate Japan”、という話をして、「日本には弱さばかりではなくて強さもある」っていうと、同じ顔をされるんですね。10年前の。時々同じ人なんですね。同じ人達が、今、思い付くのは今オバマさんの経済アドバイザー、ラリー・サマーズ。前のハーバードの学長。ラリー・サマーズはクリントン時代の財務長官で、その時に本当に偉そうに日本にいろいろとお説教したんですね。ロビット・ルーベンも、ラリー・サマーズも、お説教してこの不良債権の問題に対しての対応策が中途半端だ、どうのこうのとおっしゃった。そのラリー・サマーズが今、アメリカの不良債権の問題の対応は、どっ

ちかと言えば、90年代の日本によく似てるんですね。アメリカがこういう風になってしまったにも関わらず、「アーム・ソーリー」とか、「私は反省する」ということが一言も出て来ないのはもう癪に障ってしょうがない。

今日は僕は文化論、今日はいろいろな政治の話をして、それは文化との関係があるんだけど、僕は、文化論はあまり、文化がこうであるから、政治ではこうだということを私は思っていない。こういう文化の中にはいろんなポッシビリティがあると思います。いい政治もできるし、悪い政治もできる。軍国主義にもなれるし、平和主義にもなれる。強いリーダーシップもありうるし、全くだめな場合もある。ですから、そのもちろん文化は環境を作るという意味では文化はものすごく大事で、もしかしたら選択の幅が束縛されるんだけど、ただ、英語で言えばね、alternative choice、選択する自由は国民にあるわけですね。文化論を僕は、そういう意味ではあんまり強調しないんですが、ただ、やっぱり日本人とアメリカ人の大きな文化的違いがあるんです。その1つは、アメリカ人は謝ることは知らないという事です。日本人はどちらかというとかあるとすぐ謝るんですね。頭さえ下げればそれで済むと、政治家も官僚もビジネスマンも、何かスキャンダルを起こした人がとにかく深く頭を下げて、この禿げた頭を見せれば、もうそれで済むと。ちょっと謝り過ぎる面もあるんだけど、ただアメリカ人は謝らない。この間GMのワグナー会長がアメリカの議会へ行行って、お金を頼みに行ったんですね。その時にプライベートジェットでデトロイトからプライベートジェットで飛んで行く。このセンスのなさ。やっぱり信じられない。そうしたら、あの会社をだめにした責任があるリーダーとして、少なくともアメリカの国民に向かって「本当に申し訳ない、アーム・ソーリー」と一言言っていていいと思うのに、偉そうに何も自分に責任はないような顔をしてお金を頼むのは、そう

いう意味で、アメリカもちょっと行きすぎている。日本の謝り文化を、少しだけでも真似すればいいなと思うんですが。

そういうことも考えながら、今日は日本の政治、アメリカの政治、今両国が、今、みなさんの目の前にある大変革期にあるこの両国の政治を話しながら、日本の政治の特徴、また問題点、可能性、それについてちょっと考えてみたいと思います。大変革期だと、今申し上げましたけれども、選挙予測は非常に危ないもので、これからいつ総選挙があるかわかりませんが、多分最後まで9月の終わりか、10月まで延ばせることはできるらしいんですけども。麻生さんは多分最後までやらないだろうと思うんです。今、もしかしたら来週でも解散すると言っているのは麻生降ろしの酷評に対して牽制しようとしている意味だと思うんですが。と言うのは、選挙を今やれば、日本語で言えば、“ボロ負け”。民主党は多分、単独で過半数を取るという結果になります。自民党の中の世論調査、友達が見せてくれたんですけど、自民党の中の世論調査で自民党は今、国会議員、衆議院議員は480人。ですから、241名の過半数必要なんですけれども。最近、先週の自民党の世論調査では自民党は165議席ぐらいいしか通らない。165議席というのは公明党と組んでも、他の小さな政党と組んでもとても過半数には届かない。ですから、民主党が単独で過半数を取ることになる。55年体制、要するに自民党が作られた1955年以来、初めての本格的な政権交代になる可能性が非常にあります。ただ、9月選挙あるとしたら、今6月の末ですから、少なくとも2カ月くらいあるのでその間に何が起こるかわからない。だから、麻生さんは毎晩寝る前に祈りながら、彼はカソリックの信者だから毎晩祈るだろうと思いますが、祈りながら、鳩山さんの何かすごいスキャンダルは出て来ないのか、神様、小沢さんのスキャンダルもっともっと根が深いように祈っておりますようなことをして、いつものハッピーな顔をして寝ると。ですから、ひょっとしたら、最

後には自民党がプライドを飲んで東国原知事を次の総裁にすると行ってがんばるとか、何が起るかわからない。とにかく今、自民党はパニック状態。ですから、今の話で古賀さんが、何と言われようと、全然調べないで宮崎に飛んで行って、宮崎知事に今度衆議院選挙の自民党の公認として受けて出て下さいと言われたら、はい、喜んで、「そうしたら、私を次の総裁にして下さい」と馬鹿にされることが言われて。いかにも、今自民党がパニック状態なんですわね。

この政権交代があるとしたら、2つのおもしろい質問ができるんですね。2つの非常に重要な問題が出てくる。今日はもっと学生が多ければ、そのぐらいしかいないらしいから、今、僕はこの人数の少ない学生にいきなり質問をしたら、あんまりかわいそうだから、遠慮するんですが、学生多ければ、この前に早稲田大学でこのことをしたんですが、この質問がまずあるんですね。なぜ、今度、政権交代があるとしたら、なんであるんだろう。それは、麻生総理の人气がないから。麻生総理に対して批判が大きいというのは理由にならない。というのは今まで、今、麻生さんは20%ちょっと切ったくらいの支持率ですわね。17~8%ぐらいだと思うんですけども。森喜朗さんが辞めた時、8%ぐらい。竹下登さんが辞める時、5%。鈴木善幸さんもほとんど0に近い。不人気な総理大臣のままでも何人もいたけれども、それが変わっても政権が変わらない。総理大臣の人气がないから政権が変わるというのは初めて。だから、総理大臣に対しての批判があるから変わるってということない。

じゃあ経済が悪いから。でも、前にも経済情勢が悪い時もあったけれども、戦後の日本の特徴、日本の政治の特徴は経済が悪い時こそ自民党は圧勝する。なぜかと言うと、こんな危険な時、危ない時、不安な時に経験のない野党に政権を任せてはいけませんという、日本人の常識が働いていた。何で今になって景気悪いから、経験のない、何を

するかわからない野党に任せる気持ちになっているのか。それだけでも説明にならない。

それで、いや、今度違うのは民主党のリーダーのすばらしい魅力があって、鳩山さんと民主党に対して、すごい期待があると言えるんだったら、また説明になるけど、そんなこと言えない。今、言えるのは、民主党に対しての不安よりも自民党への不満が大きいぐらいの事しか言えなくて、野党が非常に魅力的だから、今度当選するだろうという説明にもならない。

スキャンダルがあるけれども、しかし、今スキャンダルも民主党のほうに小沢さんの秘書が逮捕されて、東北の何か土木の仕事しようと思えば、小沢さんの許可を得ないと仕事が取れないような話が新聞にも出ているので。自民党のスキャンダルは今、与謝野さんがいろいろ出てるんだけど、たいしたことない。みんな慣れてるでしょう、スキャンダルは。僕はもう45年日本の勉強してるんだけど、もう最初から、私が『代議士の誕生』っていう本をもう40年前に山岡先生が訳して下さった、あの時の選挙は何と言う、日本の場合は選挙には必ず名前が付くんですね。「バカヤロー解散」とか、あの吉田茂の、バカヤロー解散とか、何々解散。私はこの『代議士の誕生』を書いた「黒い霧解散」。黒い霧っていうのは自民党の中のスキャンダルが、その黒い霧が出て来て、それで選挙をやって、それで自民党勝ったんですね。黒い霧の中で霧が上がったら、見たらもう自民党がまた勝った。何で今、その経済が悪い、総理大臣も人気がない、スキャンダルがある、野党の魅力別がない、しかし、今までと同じように、なんでそれでも自民党は今度政権失うだろうかという。学問的、学問の質問としては非常におもしろい質問であると思うんですね。ただ、その質問に対して今、答えれば1時間半の講演では、それで全部使っちゃうから省略しますけれども。



今度の選挙のおもしろさというのは、日本の社会変動の蓄積がこの選挙で現われてくる。特に日本の地方の社会の崩壊。いわゆる村社会の共同体が崩れてきた。私『代議士の誕生』で書いたことは、ある人が代議士になろう、自民党で代議士になろうと思えば何をするか。後援会組織を作る。特に地方の名士か、農協の偉い人、あるいは医師会、歯科医師会、そういう利益団体の人達。それに何よりも地方議員。町会、県会議員の支持を得て、彼らはそれぞれ票をまとめる力がある人達。

私が大分県に研究に行った時に、ある日、公舎、僕が住み込んでいた所の政治家、佐藤文生さんっていう政治家に言われて、中津という福沢諭吉が生まれた町の奥に、山奥に耶馬溪っていう所があると。そこに行ったら勉強になる。そこにサカモトという町会議員が私の世話人であるから、彼と会って話を聞いて来て下さいと。勉強になりますと。その時にこれを持って行って下さい。カバンを渡してくれた。それで、彼の車を借りてドライブして耶馬溪へ行って、そのサカモトさんの家訪ねて行って、あいさつして、カバンを渡したんですね。サカモトさんがカバンを開けて、びっくりした顔をした。あの頃は日本の公職選挙法は、外国人は何やっても公職選挙法違反にならない。私の本が出た結果、社会党が国会でこの問題を取り上げて選挙法を変えたんですね。というのは、カバン開けたら、あの頃まだ百円札があったんです。百円札、五百円札、千円札、いっぱい入ってるカバンだったわけ。これから彼が使う選挙資金。要するに日本で言う足代。いろんな人達にお世話になって、今度サカモト先生お願いしますと歩き回る、その足代をサカモトさんに渡して、サカモトさんがまた子分に配って、それで選挙運動をするっていう時代だったんです。これ非常に日本の文化って言えば文化なんだけども、足代を英語でどういうかと言ったら、私が生まれたのはブルックリン、ニューヨークの下町。そこにタ

メニーホールという民主党のマシン、民主党のボス組織があったんです。そこで同じような選挙したんですね。私、大分に行った時に、初めて田舎、僕、田舎見た事なかった。アメリカの田舎も見たことなかったの、初めて田舎見たんだけど、この田舎の政治のやり方は僕が育ったブルックリンとあんまり変わらないなと思ったんですね。足代をね、ブルックリンのその民主党の活動家達というのはフットマネーって言うんですね。全く同じ。そのフットマネーを配って、それでブルックリンのネイバーフッドを歩きまわって、お願いしますと、タバコとか、サンクスギビングの時に七面鳥を配ったり。非常に日本の田舎に似ているところがあったんですね。それはもう50～60年前、僕が子供の頃にまだ少しそれ残っていたんだけど、もうすでに、あのマシン、民主党のマシンは崩壊しつつあったんですね。それでリフォームムーブメントが起きたんですね、民主党の中に。鮑戸さんはちょうどいらした頃の市長だったかもしれない、エド・コッチっていう市長が改革運動を起こしたんですね。改革運動を起こして、このボス政治に反対する民主党の人達がリーダーシップを取った。

なぜそんなマシンが壊れてしまったかと言ったら、私が生まれたブルックリンの町、あるいはシカゴとかボストンああいう大都市の強いボス政治がある所はそのネイバーフッドというのは、1つのエスニックグループが住むのが普通だったんですね。イタリー人のネイバーフッドがある、あるいはロシア系ユダヤ人の、そのネイバーフッドがある。それぞれのグループがそのオールドカントリー、移民して来た国の、田舎から移民して来たあの社会構造をニューヨーク、あるいはボストンのアイリッシュとか、シカゴでそのまま持っていた訳。そうしたら、このグループがボストンのネイバーフッドに住めば、昔のアイerlandとか、ウクライナとか、ロシアの村と似たような社会構造になったんですね。私の親父がウクライナから移民したんですけど、

そのウクライナの村の名前を、この日本でいう町内会の名前にしていただくくらいですね。ただ、時代が変化することによって、カリフォルニアとか、ミシガンからニューヨークに移って来て、その町に入って来る、あるいは移民してきて、その町に住んでいる人達の子供が出て行く。そして、他の町に行つて、それで全然関係ない人と結婚して連れて帰つて来る。このことによってアメリカの社会が変わつてきた訳ですね。そうしたら、よろしく頼みます、と頼んでも、何で、別にそれに答える必要ないという人が増える訳。マシーンが壊れるんですね。

日本の事情は、ある意味で全然違う。エスニックの問題はないですけども。日本の田舎に行くと、僕はあの当時のブルックリンの政治、非常に思い出します。そのサカモト町会議員、耶馬溪のサカモトさんとお金、そのカバン渡してから、いろいろ話で、じゃあ散歩しましょう、本当の村で道に出て行って歩いていたら、向こうからお百姓さんが歩いて来たんです。そうしたら挨拶されて、サカモトさんは、今度は選挙は近いうちにあるだろうと思うんだけど、その時、「ブンちゃんよろしくね」って言う訳。ブンちゃんって佐藤文生さんのことを「ブンちゃんよろしくね」って言われて。その人の答えがね、私まだこの研究始めたばかりの若手の時、非常に印象深かったのは、「やあそれはサカモトさん、あなたに大変お世話になってるから、もちろん佐藤に入れるよ」。あなたにお世話になっているから、佐藤に入れるってどういう関係あるかって、すごい考えさせられるじゃない。それが日本の選挙。お世話になっている人達はその票、何百票持つてる人が、それを持っていて、代議士の候補者に私は応援しますよ、と。じゃあ、250票持って来ますよ。あれでもって組織を作るんですね。これ日本の選挙。ですから、多くの町会議員、特に県会議員だったら、県会議員はその下に仮に付いている町会議員、市会議員いるじゃない。ですから、合わせれば、2000票から3000票も県会議員1人が持つてる

場合がある訳ですね。

昔の話ばかりであれなんですけども。豊後高田っていう所が大分県にあって、特に非常におもしろい県会議員の親分がいて、そして、話を聞きたいって言って豊後高田に夏のちょうど今ごろの暑い日に行ったら、彼が、僕は佐藤文生さんを応援している人達だと思っている人達を5、6人若い人達を集めて、家の縁側で、腹巻きとステテコの姿でビールを飲みながら、僕を待ってたんですね。それでノートブックを出して質問しようとして、その若い人達に「あなた方はなぜ佐藤文生さんを応援していますか？」という質問をした訳です。そうしたら、笑われた。「何言ってる。おれ達は全然佐藤文生さんを応援してませんよ」。クニナリさんという県議員。「我々はクニナリ先生を応援してるから、クニナリさんが、『今度の選挙はブンちゃん頼むよ』って言われてるからやってるんだ。」と。これが日本のポリティカルマシーンなんであって。そして、その佐藤文生さんは豊後高田に一度も行かなかったの。というのは、来るのは困ると言われた。要はあの時の地方の議員は票を持っている。ブンちゃんみたいな、あれはなかなか二枚目で魅力的な男だったから、あれがこの町に来て直接に国民に訴えれば、私達の仲介なしで票集められるかも知れない。来ない方がいい。佐藤文生、一度も豊後高田行かなかった。あの耶馬溪も行かなかった。しかし、豊後高田に3200票の約束を得て、その分の政治資金を渡して、日本の場合選挙の夜は票読みをするんですね。今でも進んだけれど、もう当らない。でも、あの当時は約束した3200票見ていると、3214とか3180票とか、もうほとんど確実。

これがね、ないんです、今。これが崩れたのが今度民主党が当選する一番の理由。票をまとめて自民党の政治家にデリバーする。この構造がだいぶ崩壊してきました。1つは市町村合併。これは明治以来、一番大きい市町村合併が今終わったんですね。ぼくはこの間、山梨県行

ってある市長に会ったら、ちょうどその市町村がいっぱい合併して、その市になったんだけど、今その市議員は40人ぐらいで、去年一昨年まで、合併するまで180人ぐらいだったんですね。市が大きくなって、町会議員も村会議員も消えてしまうと、誰が票をまとめるのか。いない。それと、昔村に住んでいた人達がいつも町会議員と毎日顔を合わせたりしてましたけれども、最近耶馬溪行っても、昼間はいるのはおじいちゃん、おばあちゃん、奥さん。お父ちゃんいないんですね。中津か大分で働いている訳です。子供も全然いない。もう、あんな田舎なんか住むもんじゃなくて、みんな大阪とか東京に行ってしまう。日本の田舎はそういう意味で非常に寂しい所になって、「三ちゃん農業」って、おじいちゃん、おばあちゃん、おかあちゃんの農業になってしまって、とにかく今の田舎、私、田舎大好きでよく行きますけれども、40年前と全然違うということを日本の自民党の政治家達はほとんど気が付かないかというか、怠けているんですね。それがこの結果、今度は民主党が勝つ可能性が大きいもう一つの理由につながる。小選挙区制度になったから。

昔だったら、中選挙区制だったら、「黒い霧解散」をして、この現職は嫌だと大分の県民が思えば、あの新人のかっこいい佐藤文生がいいと、佐藤文生さんが当選をして、現職の前の衆議院議長が落選をする。同じ自民党なのに。だから、結果が自民党同じ人数だけでも、ターンオーバーがあるわけです。その時の自民党には、すごくクリエイティブな緊張感があったわけです。がんばらないと、次は自分の政党の新人にやられる。この現職が弱いと他の派閥の長が見れば、誰かその選挙区に立候補させて当選させる。それは自民党が長年政権を持たせた秘訣なんですね。ですから、党内争いはひどいといろいろ言われるんですが、一党支配の時のこの争いがあったからこそ、ターンオーバーがあったり、緊張感があって、政策の変化もあったんですね。ただ、

小選挙区制になってから、1つは、今、自民党に対して不満があれば、自分の選挙区から出ている現職に投票したくないと思えば、他に自民党の候補者がいないんだから、民主党に野党に1人入れなければならない。それで小選挙区制が2大政党制につながるということになるわけです。ですから、そんなに民主党がいいと思わないけれども、とにかく今の自民党は嫌だと思えば民主党に入れるしかない。野党に入れるしかない。それが1つ大きな影響あるんですね、この選挙区制度というのは。

ただ、もう1つは、私ももう40年、日本の政治家、いろんな政治家と付き合いがあって、昔は政治家と一緒に会ったり飲んだりするのはすごく楽しかった。結構、スケールの大きい政治家が多かった。大平正芳さんとか、中曽根康弘さんとか、福田赳夫さん、三木武夫さん。何か会っていると歴史に残るような人物だなと思うような人が多かった。今は全然。今はそういう人が全然いないと思うんですが、小選挙区制度になってから、自分の選挙区に魅力的な野党の候補者がいないなら、別に自分はそんなにがんばらなくても次の選挙は大丈夫だと。日本の政治家、自民党の政治家は非常にレイジーになった訳ですね。この10年、もう15年です、選挙制度が変わってから。この15年、昔のような緊張感がないから、そんなに選挙区に戻らなくても、銀座で飲んでいいやと思う人がすごく増えた。

特に今問題になっている世襲、二世議員。昔も多かった。中選挙区制の時もお父さんが亡くなったりすると子供が出るのはすごく多かったけれども、しかし、昔の中選挙区制度の場合、その子供が本当の政治家としての能力がなければ、1回、せいぜい2回、同情票とお父さんの後援会の力で当選はできた。ただ、だいたい3回目は落選。というのは、他の派閥が、あの人は全然政治がだめだと思えば、それこそ大蔵省、その選挙区に生まれた大蔵省の偉い人を引っ張って候補者にさせ

るとかね。ですから、残った2世は結構政治家としては能力のある人が多かった。中選挙区制は。

しかし、小選挙区制度になると全く能力がなくても、野党から魅力的な候補者なければ、その人はまた再選するんですね。特に最近の日本にとっての世襲の問題というのは、選挙区にほとんど住んだことのない世襲がすごく多い。要するに、中学校から東京に来て、中学校も高校も大学も全部東京。田舎の選挙区にほとんど帰らない。それでお父さんの秘書なんかをやったりして、それで政治家になっても選挙区に戻ったら何がどこにあるかわからない。このような政治家が今すごく多い。それで、ただ党内争いがいいから大丈夫だと思って東京で遊んでいるうちに、こういう風に日本の社会がずいぶん崩壊してきて、国民の投票行動が変わってきていて、相手がそのような地方議員の支持がひとつもなくても大変な票が取れるんだということを気が付かない。今、気が付いてパニック状態。この前の参議院選挙で初めてまさかと思うような人が落選した訳です。今度の選挙も有名な、いわゆる有力者と称する自民党の議員が数多く落選することはほぼ間違いない。それは日本の社会の変化の非常に重要な頭れであると思いますね。私も歳を取ったから、もう二度と『代議士の誕生』のような厳しい研究はしたくてもできないんだけど、誰か若い人が今、私が話したような日本の社会変動と投票行動、選挙の仕方、この研究をすれば、すばらしい……すばらしいって言うよりも非常に意義のある本ができると、つくづく思います。

もう1つのこのおもしろい問題は、もしも民主党が政権を取った場合、何をやるだろうかという問題があります。今日は別にマスコミもないでしょう。だから、このこと言いますが、この間おもしろい経験をしました。というのは、僕はもう40数年、日本の研究をしてこれまた日本の文化の特徴というか、日本人のすばらしいところだと思

うのは、長年コミットメントをして、ずっと日本の研究をして、それで中立な立場で、とにかくできるだけ客観的な立場で分析をしている努力をしていると評価されると、年が経てば経つほど信頼されますね。非常に深い関係になりますね。ですから、私もとにかく最初は全然日本の専門家になるつもりなく、なってしまったんだけれども。おもしろくって。私、日本の政治家のやってること、ある意味で非常に尊敬しているんですね。いい事やってる政治家も特に昔は多かったんですね。この国を何とか良くしようと思ったり、また、選挙民のために一生懸命働いてという、多分そういう気持ちがあるから伝わってると思うんですけどもね。

いずれにしても、昔から知っている政治家が多くて、段々とその政治家が偉くなる訳ですね。日本の年功序列のこともあるし、一番自分が歳だなど思うのは、今の政治家の大部分のお父さんを僕は知っているんですよ。それだけに2世が多い。その中で鳩山さんも20年以上活躍している。菅直人さん、彼はまだ市川房江さんの手伝いをしてた頃から知っているので、今その2人が民主党のトップになっている。そうしたら、2週間くらい前に3人で夕食をして、夜、結構長い時間話合ったんですね。その時、いろんな意味でおもしろかったです。1つは、これがこのまま行けば民主党非常に強いと思うのは、菅直人さんという方は自分が総理大臣になりたくて、なりたくてしょうがない人だったんですね、ずっと。それで非常に政治家としての能力のある、また、政策に詳しい、勉強してるんです。ご存じの通り非常に雄弁で、話が上手。しかし、なったのは鳩山さん。彼らと食事したちょうど1週間前に岡田克也さんと、今幹事長になった岡田さんとも2人で食事をした時に、岡田克也さんはだいぶがっかりしていたのはわかった。自分がなりたかったし、多分、鳩山さんよりも自分のほうがよりいいリーダーになれると思っていたんだけれども、しかし、その時の岡田さん、



特に鳩山さんと3人で菅さんと食事した時の菅さんは今度が本当のチャンスだと。このチャンスを逃せば、もう二度と政権を取る可能性はないという気持ちで何とか鳩山を支えよう、かわいかった、菅さんの態度。鳩山さんは穏やかな方なんです。あまりしゃべらない。菅さんはいろんな政策について菅さんはもう自分の意見が非常に強い。鳩山さんはどっちかと言えば、みなさんの意見を聞いてコンセンサスを作るような感じがちょっとするんだけど、しかし、菅さんは一生懸命優しく鳩山さんを立てながらいろんな事を言うわけですね。これいいなと思ったんですね。

もう1つはですね、官僚と政治家の関係の話になった。私は民主党の官僚バッシングは非常におかしいと思っていますし、その話もした。本当にこの話オフレコにして下さいね。その時、今まで政権交代は抽象論だったんですね。政権交代があればこうするというのは、それこそ学者がしゃべるような感じでリアリティのないのがつい最近までの民主党。ただ、あの夜の鳩山と菅は、あと2、3ヵ月したら我々は政権を取るだろう、どうしよう？その緊張感、興奮。今の民主党の人達に会うと、その緊張、興奮状態、ハラハラしてるというのがすごくあります。今まで政権取れば、今度、官僚内閣でなくて政党内閣、官僚でなくて代議士をいっぱい送り込んで、局長クラスを政治家にするとか言ってきたじゃない。このことをしたら、1年も持たないんですよ。その晩、菅さんだったと思うんだけど、「官僚と政治家の関係、もう1度考えなければならぬね」と言われたんですね。やっぱりこの国はアメリカの大統領制と違って、もっとイギリスのようなシステムだから、やっぱりアメリカのやり方あんまり参考にならないかもしれないというのをやっと言われていた。僕は前からその事を彼らに言っていたんですけど、実際はアメリカの大統領制は日本の議院内閣制と全く違うんですね。ですから、官僚と政治家の関係はアメリカのポリティ

カル・アポインティーなんかへんに真似したらおかしくなるし、アメリカのシステムだっておかしいんですよ。アメリカにはとってもすばらしいところもあるんですけども、昔から日本の政治学者、日本の政治家はアメリカのシステムは非常に理想化、美化した見方をすることがすごく多い。だから、アメリカのようになれば日本は良くなるということ言うんだけど、今のオバマさん見てご覧なさい。どれほど苦労してるか。今はあのアメリカは本当にガバナビリティのできる国であるかどうか。ますます疑問に思ってます。金融経済問題もものすごい今深刻。そうしたら、財務省の幹部達は大臣入れて19名だそうです。今、大臣は、後の18人はまだ1人も。…今、外務省の東アジア担当次官補、やっとな昨日キャンベルさんに、やっとな決まりました。もう政権取って4ヶ月でしょう。今度の駐日大使になる、誰も聞いたことのないジャン・ルーさんという方が、一応オバマさんに指名されているんだけど、これがいつ上院で承認されるか。多分、秋でしょう。だから、彼が日本に来るのは多分10月。早くても10月。オバマさんは日本には11月に1日だけ来ます。その前に大使が来てなくて、準備もしてなくて。このシステムを真似しようと思う人の気が知れないと僕は言ったことがある。

それと、この間、中国の共産党の幹部達がニューヨークにいらして懇談をした時に、この前の選挙で民主党、オバマさんは民主党、大統領は民主党、それで上院も下院も民主党が過半数になったから、これからのオバマさんは中国の胡錦濤以上に力があって何でもできるんですね、ということ言われた。彼はアメリカの政治のシステムがわからないということ。というのは、議会で過半数を持っても、ただ、オバマさんが「じゃあこうしよう」と言ったらそれで議会の民主党の人達が、「あ、そうですか、はい、わかりました」って言いますか？言いません。アメリカの場合、党議拘束が一切効かない。議員はそれぞれ1人

が態度を決める。議会に対して説得しないと、納得させないと何ひとつできない。昨日やっと下院で温暖化に関しての厳しい法案が通ったんです。通ったんですが、その投票をしたのは賛成219名、反対212名。7票だけで通ったんです。民主党が過半数持ってるんですよ、下院で。しかし、40人以上の民主党の議員は反対したわけ。自分の選挙区は石炭のある選挙区であるから石炭が使えなくなると困る、反対。7,800億ドルもする、72兆円もする刺激対策をオバマさんは3週間以内に載せたわけですね。その時に上院の院内総務のハリー・リーが新聞記者に聞かれて、この法案をどうしますか、どう載せるか。まずの返事はね“I don't work for Barack Obama.”これは民主党の上院議員のトップリーダーが、私はオバマさんのために下で働いていない。ナンシー・ロペスも下院議長でオバマさんと対等な立場で交渉するという態度を取る訳ですね。

日本の場合、自民党、ほとんど誰もいいと思わなかった給付金をやっぱり総理大臣が「やる」と言った以上、やっぱりみんな賛成する訳ですね。賛成しなかったのは党を離れた渡辺善美と棄権した小泉純一郎だけなんです。日本の場合には党議拘束が非常に強い訳ですね。イギリスと同じ。強すぎるんです。例えば、僕は非常によかったと思うのは食の問題。あれ党議拘束を外して国会議員1人1人が自分で決めたでしょう。私、最近、『サンデープロジェクト』という番組、見るのも嫌。あのアジテーターみたいな、国民の感情を煽るようなあの態度、僕は好きじゃないし、いい番組だとは思わないんだけど、先週たまたま見ていたらね、丸2時間見たんですけどね、すばらしかった。各党の代表が出て来たんだけど、それぞれ自分の意見を言って、自民党の河野太郎とか、社会民主党の阿部さんとか、それぞれ自分の意見で違う見方をして真剣にしゃべるんですね。あれ党議拘束が出ていたら、ああいうような本当の意義のある本音の話にならない。党の建

前論ばかりになって。日本はもっと党議拘束を緩めて、もっと議員が1人1人まじめに考えて、自分で態度が決められるような事をやったほうがいいと思うんですが。

いずれにしても、日本は官僚と政治家の関係、これやっぱり問題は官僚にあるというよりも政治家にあるんですね。官僚を使いこなせるかどうかのほうが問題で、レイジーな自民党の議員は官僚に任せて、後でやればいいんだというこの発想がある限り良くならないし、本当にやろうと思えば、官僚とうまくやるのが大事なんです。それで管さんはイギリス行ったんですね。イギリスへ行って、向こうの政治家達とどういう風に内閣がデモクラシーとの付き合いをするのか。いろいろ勉強して帰ってきて、最近の彼のトーンが変わってきたんですね。今、脱官僚どうのこうの、言わないで、政治家と官僚の役割分担とか、政治家がもっと官僚を上手に使いこなす事が大事だとか、非常にいい変化なんですね。ですから、民主党が本当に政権を取るかも知れないという緊張感があるから、もっと原始的な政党になりつつあると思います。ただ、間に合うかどうかが問題であって。

昨日会ったある民主党の、昨日の昼一緒に食事したある民主党のまた別な幹部と話したら、政権を取ったらまず何を、1年間、何をしようか。今2つしかない。子供手当。ただ、これ、みなさんがっかりするような事になる訳です。というのは、すでに民主党が子供1人あたり15歳までの子供1人あたり2万6000円の毎月の子供手当をすと言ったんだけど、多分、来週マニフェストが発表される時に、最初に1年間はその半分の1万3000円にして、2年目から2万6000円にする。最初に1万3000円と言って、それで政権を取って2万6000円にすればみんな喜ぶけど、2万6000円って言って政権を取って1万3000円しかくれないと言ったらみんながっかりする。こういう、ただ、財政的には無理。無理なんですね。最初の1年間、なんとか無駄があるとか、10

兆円とか、20兆円ももっと上手に使えるお金があるはずだって言うけど、探して2年目から2万6000円と言ってるんだけど、本当にできるだろうか。僕、非常に疑問に思う。それと高速道路をタダにする。まあいいかもしれませんが。今日、鮑戸さんが非常に親切にタクシーでいらっしゃって、東京からタクシーで来たんだけれども、2時半までに間に合うだろうかと心配しながら来たっていうのは土曜日だから1000円で高速に乗れるから、まあ渋滞中の渋滞ですごい時間かかる。これがまた0になってタダになれば、経済刺激になるかも知れないけれども、公害問題にもつながるんですね、あれだけ排気ガスがまた多くなるし。それに国民がそれだけで、1万3000円の子供手当と高速道路がタダだという事で来年の参議院選挙でこんなすばらしい民主党、今度、参議院でも単独させようとことになるのだろうか。という話を昨日民主党の方と話したら、いや先生、正にその通りだと言われるんだけれども。じゃあどうしたらいいのかということのをこれから勉強。

ですから、政権が変わっても混乱は続くと思うんですが、ただ時々、どの国もやっぱりチェンジが必要ですね。今度の政権が変わることによって、1つ僕は日本にとってはいいと思う事は、世代は交代する。1つは自民党の大物代議士がたくさん落選してさよならですね。もう戻って来れないと思う。というのは、今度民主党が勝てば、前の細川政権の8ヵ月ではなくて、何とかもう4年間がんばると思うんですね。できるだけ解散をしないで。どんなにマスコミに批判を受けても解散しないで、そのうち何とかする、そのうち政策も考えるということで4年間がんばると思うんですね。そうしたら4年間先にね、もう70過ぎていて今の現職がまた選挙に出るということは例外中の例外で。自民党も世代の交代になる。何よりも民主党は若い政党なんですね。だから、鳩山、菅。小沢なんかはもう60か70過ぎてるんだけれども、後は40

代。岡田さんはまだ55。他の人達も40代、30代。今度内閣が作られる時に、みなさんも聞いたことのない名前の方が今度入閣するんですね。その中には非常に優秀で明るい展望を持つ、考え方を持っているような人も結構いると思うんですね。ああ、日本も変わったなと思うといます。これが日米関係にとっても非常に重要なことで、今度民主党が政権を取ったらアメリカで勉強した、大学院にいた代議士はものすごく、私が最初に日本に来た時、それからもう20年くらい、英語でインタビューできる政治家1人しかいない。宮沢喜一だけだった。ニューズウィークを英語で読むのは宮沢喜一だけだって有名だったんですね。あれはたぶん引き出しの中に日本語版のニューズウィークが入ったと思うんだけど、一応英語版のニューズウィークを読むのは宮沢さんだったのが有名だった。それだけ英語のしゃべれる政治家が少なかった。今の麻生内閣見ても、アジアの他の国々に比べれば、間違いなく一番英語能力の少ない内閣は日本。これは日本にとって、英語は話せるのは何よりも必要だということじゃないけど、やっぱり外国の大臣なんかと話す時に英語で話せるのは、韓国はアメリカでPh.Dを取って学界から政界に入る人ものすごく多いし、中国もアメリカ帰りも今、多いし、日本の問題そのひとつ。ただ、民主党は結構多いですね。私の学生も民主党の議員になっているのもいますし、ケネディスクールとか、ジョージタウン大学とか、いろいろなアメリカの大学院にいた代議士が結構います。

問題は、アメリカから見れば、この人達はやっとなコミュニケーションができる。お互いに何か通じるという幻想を起こす可能性は大きい。言葉は通じるけれども、今の若い人達のアメリカに対しての考え方は、多分、多分じゃない、間違いなく戦争あるいは占領時代を経験した自民党の代議士達とだいぶ違う。言ってみれば、よりドライなんですね。あの占領時代、戦争の悲劇を自分の目で見て経験した人達は、

非常に複雑な気持ちがあるんですね。アメリカに対しての感謝、戦後の日本を支援して仲良くして。感謝の気持ちと自分のプライドに傷が付いたという気持ちと、いろんな複雑な気持ちがあったんだけど結論としては、何とかアメリカとのスペシャル・リレーションシップ、特別な関係を持つのが何よりも好景気にとって重要であるという、二度とああいう悲劇がないように使命感がそのある歳いってる人達にはあると思うんですが、若い人達、特に民主党の場合の若手の多くはアメリカとの関係はもちろん重要であるけれども、特別な昔で言うような、特別な関係ではなくて、まあいろんな関係の中で一番重要かも知れませんが、中国との関係も重要だし、韓国との関係も重要だし、また、自分なりの考え方を持ってそれをアメリカに伝えていくことも大事だということで必要な変化だと思うんですが、これに対してオバマ政権、アメリカが充分理解しているかどうか、ちょっと疑問に思っている。

私はオバマ大統領という方は、稀に見るすばらしい魅力的な大統領であって、キャンペーンの時、私のオバマさんのアジア政策のアドバイザーの仕事をやっていたし、今何も関係していないけど、それをしていましたし、今も大変支持しています。彼はいろんな事を同時に、必要な事をやろうとしていると思うんですね。温暖化の問題もそうだし、何よりもアメリカの憲法法権制度の抜本的な改革をやろうとしているんですね。私は日本に東京半年、ニューヨークで生活しているんですが、日本に来ると、まず着いた日の次の朝、どこ行くかと言ったら区役所行く。外人登録をすれば、すぐ国民健康保険に加入できる訳ね。日本国民健康保険、僕は帰化していませんよ。日本国民ではないんだけど、外国人も国民保険は入れる訳ですね。それは安くてあのカードを、保険証を持てば、どこの病院にも行けるし、このすばらしい制度、どういう風にして維持すればいいのかとことをまず民

主党に考えていただきたいと思うんですが。アメリカ、今5,000万人は保険ない。アメリカで仕事を失うと同時に健康保険も失う。ほとんどの健康保険は職場、その会社の保険に入るから、仕事失う場合は、給料失うだけじゃなくて保険も失う。プライベートマーケットで個人として買おうと思ったらだいたい月に10万円。1000ドル。私、この事はもう痛いほどわかります。娘2人いて、今運よく1人はフルタイム、正社員の仕事が取れて少なくとも今日まではクビになってない、ありがたいことに。昨日、同僚も、今、アメリカの失業率10%ですから、若い人達20%ですから、仕事ない人が多いんだけど、僕のもう1人の娘フリーランスで仕事してるから、日本の契約社員、パート・アルバイトと同じで、ベネフィットがない訳。保険がない訳。そうしたら、フリーランスの安い給料で健康保険買おうと思ったら、もう後は食べ物を買うお金ない。僕は手伝ってるんですけど。月に1000ドル。信じられない、10万円。年に100万円以上かかるんですね。保険買おうと思ったら。このシステムを何とかしなきゃならないというオバマさんは立派だと思うんだけど、これに対して民主党の中の反対がまだ多い。今日、その話をする時間はないのですが、アメリカのシステムはいいところがあるんだけど、こういうようなめちゃくちゃなことにならないように日本にがんばって欲しいと思うんですね。

日米関係については、私は、オバマさんは支持しているんですが、非常に心配している。日本を過小評価、無視をする。要するに日本の経済も良くない、政治もめちゃくちゃ、何も言って来ない。提案することも1つもない。エネルギーと時間をかけて、せっかく総理大臣の名前覚えたと思えば、次の日に総理大臣が変わる。この国とそれほど重視する必要あるだろうかということがね、今、残念ながらオバマ政権の中には結構その気持ちがあるんですね。オバマ政権だけじゃない、ワシントン全体にそうなのであって。ただ、今、オバマさんが非常に



重視している省エネルギー、環境問題、温暖化の問題。どの国が一番のテクノロジー？大変な経験、省エネルギー、一番優等生であるという国はどこであるかって言ったら、ここなんですね。だから、僕は今度民主党が政権を取った場合、新しい日米関係のアジェンダ・セッティングを民主党がやるべきだと。中国の水の問題に対して、日本が一番水をきれいにするテクノロジー、技術を持っているのは日本の会社なんですね。その水問題。環境問題。これで日米中の協力があれば、いろんなことができるということを民主党が、鳩山総理がワシントン訪ねて、オバマさんに会った時に、次から次へいろんな提案をして、ホームワークをさせる、どう答えようかということトップから考えてもらう。こういう時代になるべきだと思います。

僕は、日本は潜在的な力非常にあるように思っていますし、これからはしばらく政治は混乱するだろうけれども、昔の経済学者のシュンペイターが使った言葉、クリエイティブ・ディストラクションという言葉使いましたが、創造的破壊。その経済が変わっていくのは、今あるものが潰れて次のものになる。今、日本の政治はね、クリエイティブ・ディストラクションの段階にあると思うんです。これは、できるだけ、今のところはね、ディストラクションばかりやってね、クリエイティブが何ひとつ見えないんだけど、これからクリエイティブな新しい政治が生まれるようにね、なるように期待してるし可能性は多いと思うんですね。だから、この日本の潜在的な力が表に出て来て、また日本がいろんな意味でよりいい国、より世界でのプラスな役割を果たし得る時代がそんなに遠くないと思っています。だから、45年、同じ国のことを45年も勉強するとは、昔は、若い頃、そんなことはまず退屈でしょうがないだろうと思っていたと思うんだけど、僕はこんな風に話しをして、もう1時間半近く話しをしたんだけど、みなさんは退屈したかも知れませんが、私自身は日本の話をして

退屈したことない。この国、非常におもしろい国であって、いろんなポッシビリティがある国であるし、また、不思議なおもしろい矛盾のある国でもあるし、退屈しないし、また、将来に対してオプティミスティック。オプティミスティックじゃなくなったら僕は辞めます。もう勉強もしない。オプティミスティックじゃない時に続けてやるのは、僕は全然興味がない。日本の将来についてはオプティミスティックであるから、私もそれを見て分析して、言いたいことを言うような立場で、まだ日本の事を続けて勉強したいと思っている。

私の話、一応この辺で終わらせていただきます。ありがとうございます。(拍手)

**司会** 軽妙洒脱なお話ありがとうございました。それでは先生のほうから質問をお受けいたしますということでありますので、せっかくの機会ですので、どうぞ遠慮なく質問のある方は挙手していただけますか？質問ありませんか？

**鮎戸学長** では、1つ質問させていただきます。カーチス先生、日本は潜在的な力がある。立派なリーダーさえ出れば、この潜在的な力が花咲くことができるだろうと最初におっしゃったんですが、話を聞いていますと、自民党からすぐ立派なリーダーは出そうにないし、民主党のリーダーもすぐにはリーダーシップを発揮する可能性が非常に難しそうだという印象です。やはりアメリカの場合には、リーダーシップというものが育つような政治家のしくみになっていると思うんですね。やっぱり話も上手くて、政策通で、相手を説得しなければ伸びていけない。そういう説得の文化の中で政治家が育っている。だから、オバマさんのようなすばらしい政治家が出てくる。日本の場合はそういうんじゃないで、正にコンセンサスの政治で意思決定が生まれて行くと

いう形ですので、なかなか優れたリーダーが生まれるっているのは難しいんじゃないかと思うのですが。何か日本の政治家に、こういう政治家が出てほしいというようなお考えが何かありましたら、どんな事でも結構です。教えていただきたい。

**カーチス教授** それに対して2つ事が言えます。1つは、すばらしいリーダーシップと、すばらしいリーダーを区別して考えるべきだと思うんですね。集団的な、ある意味での集団的なリーダーシップも、特に日本の場合は充分有りうと思う。さっき私が、菅さんも岡田さんも、今、一生懸命、鳩山さんを支えているという意味はそういう意味なんですね。あのリーダーシップのグループとして、本当、方向性がはっきりして、ビジョンがあって決断力があれば、1人のリーダーではなくて、その集団、例えば内閣が本当に1つのものに、民主党が言ってるように、1つのものになれば、アメリカのような1人のリーダーではなくて、党のリーダーシップというようなものも有りうと思う。今の日本にもしも期待するんだったら、それだと思うんですね。ただ、私も日本の政治家、特に若い政治家達と話をする機会が結構あるんですが、私はアメリカを見習うべきことは1つ、それはオバマさんの説得力のすばらしさ。その説得力、僕の大学の先輩、昔の先生でリチャード・ニュースターという先生がいたんですが、彼が『プレジデンシャル・パワー』という本を書いて、ちょうど大統領になったばかりのジョン・ケネディー、彼が感銘を受けてニュースター、アドバイザーとして。その数年後、ちょうど僕が学生になった時、ニュースター、がコロンビアを辞めてハーバード行ってケネディスクールを創立した人なんです。で、彼がプレジデンシャル・パワーの定義をしたのは、“the power to persuade”という英語を使いますね。説得する力。これが一番政治家に必要なんです。あまりにも日本の政治家はなさ過ぎる。官

僚が書いた原稿をそのまま国会で頭も上げないで読み上げる。こんな国ある？あるいはテレビに出る時に、今度官僚主導じゃなくて政治主導になるべきだから、いかにも自分が官僚以上に知識があるんだと、わざと話を難しくする政治家が特にね、若い政策通と称する政治家がものすごく多い。こないだ若い1年生、2年生議員と朝食会で僕話をした時、その中にはね、すぐシッポを振ってテレビに出てくるような人も結構いたんですが、彼らに僕は言ったのは、テレビに出る時に自分が官僚以上に知識があるとか、いかにも頭がいいってことを何も見せる必要はない。それよりも日曜日の朝のテレビ、まだパジャマ姿でコーヒー一杯飲んで、まだ半分寝ぼけている夫婦がテレビを点けて、彼らが君の言ってることに対して関心を持って、もっと聞きたいという気持ちを起こすように考えるべきだ。

昔、フランクリン・ルーズベルト炉辺談話っていうファイアサイドチャット、ラジオでよくやったんですね。ルーズベルトは自分で原稿を書いた。ルーズベルト大統領が原稿を書く時に意識的に頭の中に自分が知っている大工さん、八百屋さん、家庭の主婦の顔を見ながら書いたというのをこの間、読みました。なるほどな、金融問題、あの時の、金融危機の時の最初のファイアサイドチャットは金融危機の話だったんだけど、それはどんな人が読んでも、経済学の博士号を持っている人も、中学校しか出ていない労働者が聞いても、誰が聞いてもわかるように話をする。オバマさんはその才能を持っている。それはもちろん、自然なカリスマもあるんだけど、やっぱり努力するんですね。演説する時にその練習はする。タウンミーティングをよくして、そのタウンミーティングの前にそういう質問されるだろう、それで知識を得て、それでわかり易くしゃべる。そのわかり易くしゃべるのは政治家に必要なこと。ですから、昔の自民党、要するに党内の派閥の争いで上に上がって行って、大臣になったり、総理大臣になっ

たりした時代は終わったんだから、これから日本の政治家ももっと説得力のある政治、これをしなければならない。

しかし、私の最近の印象なんですけれども、大学生と会うと、日本の大学生に話をすると、だいたい僕は今、話をする時には、一方的に今日みたいに話をしないでまず学生に質問をするんですが、昔は質問をしても、なかなか勇気を持って返事してくる人は非常に少なかった、だから、ほとんどできなかった。しかし、最近の日本の大学生は、結構、話すんですね。自分の意見も持ってるし、結構アーティキュレートって言うか、よく表現する人は町がなく多くなっていると思う。だから、問題は学生じゃない。問題は教授です。教授達が学生にそういう風に発言させたり、また、教授と違う意見を持って怒られることないという安心感を持たせて、もっとコミュニケーションをすることがあれば、その学生の中には政治家になる人もいるはずだから、政治家も同じように、発言、説得力を持つようになる。僕は今の若い政治家の中には何人かはいると思う。ただ、今まで経験ないから、権力を持つ経験がないから、どういう人かというのはまだ見えないんだけど、これからの4年の間に案外すばらしい政治家がいるな、彼の話は本当にわかりやすいし、説得力あるなっていう政治家は本当に僕は出てくると思う。そう思っている。

**\*\*** 私は今大学3年生で国際社会学部にいるんですけど、先生のお話を聞くまでは、国際社会学部でもっと世界のことを勉強して日本を早く脱出して世界に羽ばたこうと思ったんですよね。日本を早く見切りたと思ったんですけど。政治もどうなるかわかんないし、きっと就職とかも就職難だし、この間ガイダンスでも、本当に君達は、本当に大変だと思ってるって言われて落ち込んでいて、でも、先生の講演を聞いて、すごい希望が見えてきたなと思って、ありがとうございます。そ

れで、質問と言うか、私ももう20歳を超えて、今度選挙、こないだ市長選を投票しに行つて。さいたま市なんですけど。今度は小選挙区制があつて、今のところまだ3人しか立候補者がいなくて、正直自分的には、どうでも、イマイチぐつと来ない感じがして、今のところまだマニフェストとかも書かれていなかったのて、本人のホームページとかを見てみたんですけど、アバウト過ぎると思つて。今日、その小選挙区制つてというのが、二世の議員とかも、あんまり魅力がない人でも当選してしまうつてことがわかつて、これから日本はこの小選挙区制を続けて行つて大丈夫なんでしょうか？という風に思つたのです。よろしくお願ひします。

**カーチス教授** 今、とてもいい質問とすばらしいコメントいただいてありがたいと思つてるんですが。それに対してまずいろんな事を申し上げたいですが、1つは、日本の歴史見てると他の発展途上国、明治時代の日本が、他の発展途上国と非常に違うものが1つあつたのは、いわゆる頭脳流出、ブレインドレインがほとんど日本はなかつた。外国に勉強に行く人は多かつたんですね。ドイツもイギリスも。アメリカにも。外国に勉強に行つて必ず帰つて来たのが日本。他の発展途上国、中国もそうなんだけど、韓国もそうだと思う。発展の時にアメリカとか外国に行つて、そのまま向こうで住むのがすごく多い。日本は少なかつた。今になって初めて、日本が本当に深刻なブレインドレインの問題に直面しています。それは特に女性です。周り見て、女性は男よりも勇気がある、というか、ベンチャーをする勇気があるのは日本だけではなくてアメリカもそうなんです、特に日本は、コロンビアの大学院に来る日本人を見てると、そういう女性は結構多い。しかし、最近男も10年日本の会社で働いて、このままじゃおもしろくない、黙つて我慢すれば、ずっと終身雇用がまだあるから大丈夫なのに、アメリカ

に流れて来る。日本に対しては希望がない。今おっしゃったように日本に対して希望がない。ですから、脱出じゃなくて、ちょっと出てコロンビアの大学院に1年、2年いらして、日本戻って来たほうがいいと思うんですが、日本のリーダー、それぞれ政治家達が、こういう若い人達が将来に対して希望を持つようなビジョンを打ち出さないと、一番優秀な人達が出て行っちゃう。こういうことになると思うので、どれほど政治指導者達がこの事を深刻に受け止めてるのか、疑問。

小選挙区制度は私は全然日本にとって良くない制度だと、最初からそう思いましたし、今もそう思うんですね。やっぱり2大政党制になるんだけど、だんだんそういう方向に行くのですが、日本の社会、要するに、深い亀裂のない、例えば人種問題、宗教問題、あるいはこれから階級の問題ももっと激しくなるでしょうけど、貧富の差が激しくなればあるんだけど。しかし、日本は、そんなに、アメリカのような亀裂はそんなにないんです。この国はやっぱり緩やかな対等性のほうが、要するに、白か黒かではなくてグレーゾーンの中でもうちょっと濃いグレーか薄いグレーかその中ぐらいか、緩やかなパーティシステム、緩やかな多党制のほうが日本の文化、日本の社会に合うと思うんです。

小選挙区制度が定着してしまったら、民主党と自民党の違いは、日産とトヨタの違いくらいにしかないという事になる危険性は多いにある訳であるんですね。ただ、残念ながら、この制度を変えるという事はほとんど不可能。なかなか選挙制度変えるのは難しい。中選挙区制度1925年に出来て、ずっと1993年まであった制度なので。今の占領時代に1回だけまた違った制度があったけど。今の制度も今の代議士の中には、この制度を本当に変えたいというのはすごく多いけれども、なかなか制度変えられない。ですから、それであなたみたいに誰に投票しようかとホームページも見て、マニフェストまだ出てないんだけど、

マニフェストを見る。これはすばらしいけど、こういう選挙民が多ければいいんですけど、残念ながら、そこまでまじめにやる人は少ないと思うんですが。それで、誰を選ぶかということを考える時に、1つはその候補者が魅力的であるか、その人の言っていることが自分の意見に合ってるか。それとある意味で別の問題で、この政党のほうが政権取れば、候補者はそれほど好きじゃなくても、やっぱりこの政党に政権取って欲しいという判断もできるから。あるいはさっき言ったように民主党、その候補者もそれほど魅力を感じないけど、やっぱりチェンジがいいと判断する、あるいは、いや、そうじゃなくて、いくら自民党は問題だと言っても、いくら麻生さんのあの顔は好きでなくても、今の難しい時代に民主党には任すことできませんと、やっぱり鼻つまんで自民党入れるということも有りうるし、あるいは自民党の候補者が本当にすばらしいと思えば、それか公明党がいいとか、いろいろあるんだけど、とにかく自分でいろんなことを考えて判断をして、それで投票をする。投票をする事がやっぱり大事だと思うんだな。投票しなかったら、棄権をするというのは後で文句を言う立場にないと思うんですね。ですから、日本人は、日本の政治はひどい、ひどいとよく言うんだけど、誰がこの政治家達選んだのか。それはやっぱり日本の国民で、自分が投票してなければ、あまり文句を言う資格がないということを考えて、投票が高ければ日本の政治が動きますね。良い方向に。そう思います。

**司会** イギリスのことわざの中に「政治はその国民のレベルを超えない」とあります。そういう意味では我々日本人自身が政治に対してもっと積極的に、また真摯に考えなければいけない、こういう時期が来ているだろうと思います。そして、もしもカーチス教授が予言されておりますような民主党政権が誕生するということになりますと、鳩山



由紀夫さんは東洋英和の幼稚園の卒業生でありますから、この東洋英和から初めて総理大臣を出すということにもなるわけです。それは英和の大学20周年、また学院の125周年にふさわしい、新しい日本の政治のスタートではないだろうか、こう考える次第です。

本日はカーチス教授から非常に知性溢れた、そして、語り口も何か、ニューヨーク・ブルックリン生まれの“江戸っ子”のようなお話で、もう1時間半があっという間に過ぎた感じがいたします。改めて、カーチス先生にみなさんから感謝の拍手を頂ければ幸いです。どうもありがとうございました。(拍手)

## ジェラルド・カーチス（コロンビア大学教授）略歴

1940年ニューヨーク市生まれ。1969年よりコロンビア大学で教鞭をとり、1973年～91年のうち、12年間同大学の東アジア研究所長を務める。2002年に国際交流基金賞、2004年に旭日重光賞を受賞。

### 主著

- 『代議士の誕生——日本保守党の選挙運動』1971年  
「日本型政治」の本質——『自民党支配の民主主義』1987年  
大平正芳記念賞受賞
- 『ポスト冷戦時代の日本』1991年  
『日本の政治をどう見るか』1995年  
『永田町政治の興亡』2001年  
『政治と秋刀魚——日本と暮らして四五年』2008年